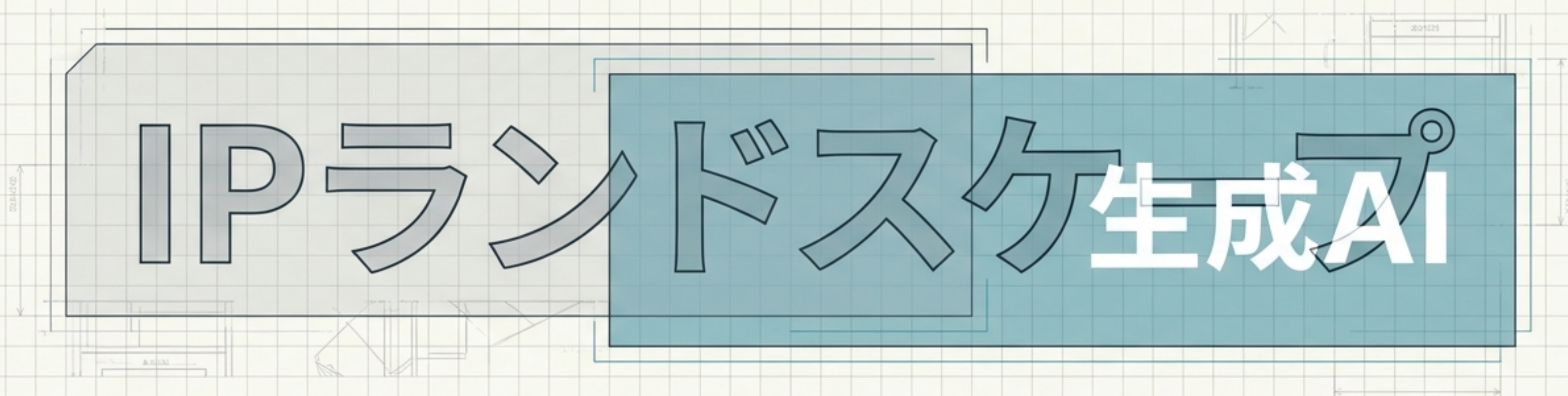


『IPランドスケープ』はどこへ消えたのか？



PIFC 2026 比較分析から読み解く、生成AI時代の知財実務パラダイムシフト

Strategic Briefing // September 2026

事実

史上最大規模のPIFC 2026。しかし「IPランドスケープ (IPL)」の露出は激減し、主役は完全に「生成AI」へと置き換わった。

洞察

IPLは衰退したのではない。「生成AIによる高速化・民主化」を経て、バズワードから実務レイヤーに”埋め込まれた”のである。

行動

知財部門は「レポート作成」から脱却せよ。AIが浮かせたリソースを、「経営翻訳」と「組織変革」という人間固有の付加価値へ再投資する時が来た。

PIFC 2026は過去最大規模へ。 しかし「熱源」は入れ替わった。

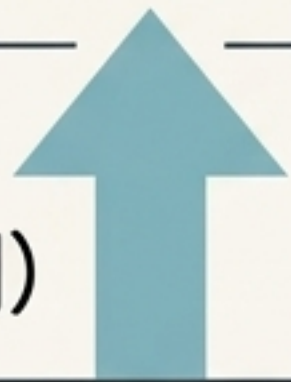
累計来場者数

15,207名 → 15,502名



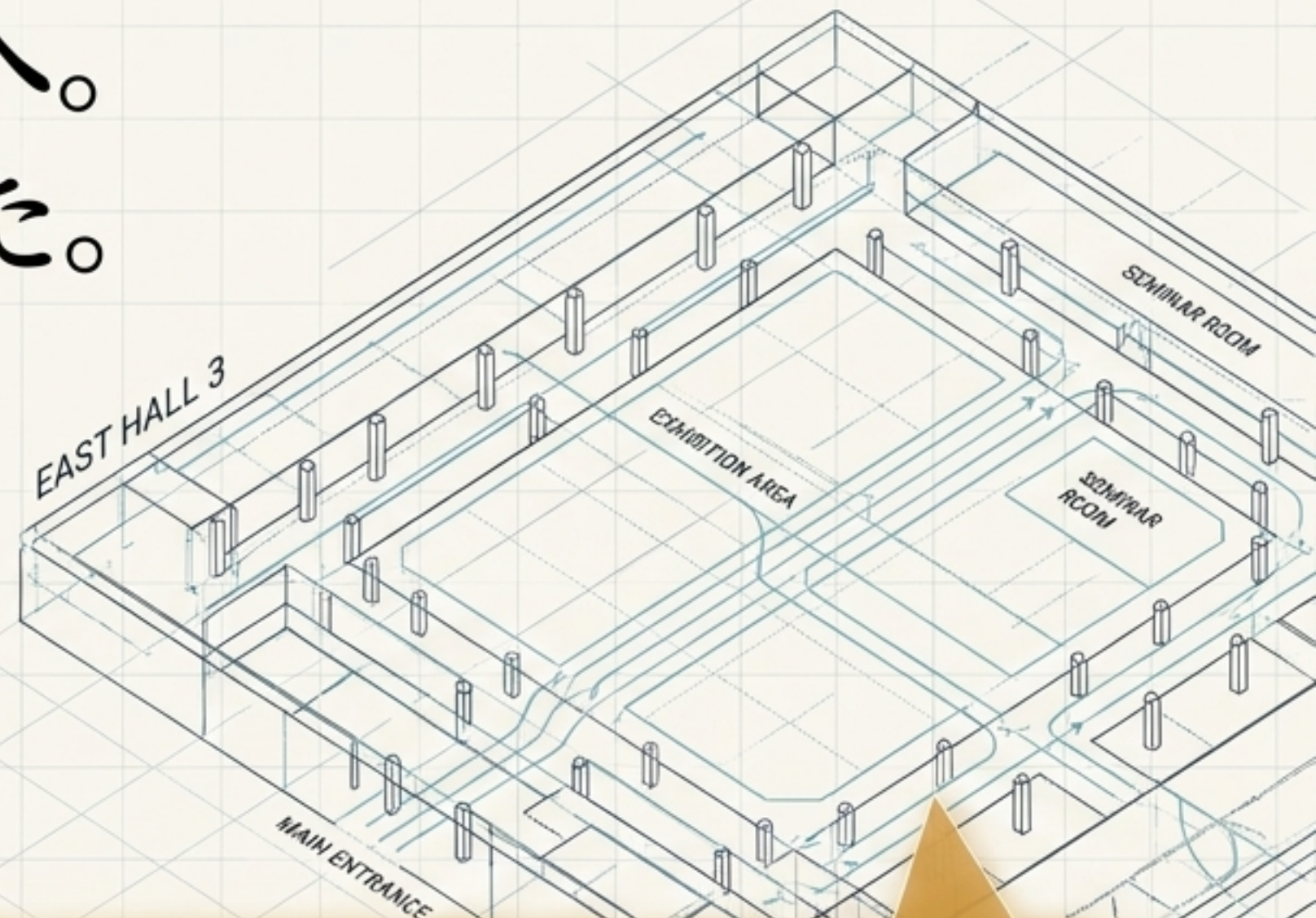
出展規模

158社 → 171社 (367小間)



プレゼンテーマ

86 → 108テーマ (過去最多)



熱気は過去最高を記録。

しかし、出展・講演の主役は知財ガバナンスから「生成AI／AIエージェント」へと明確なシフトを遂げている。

消えゆく看板、台頭する「言い換え」

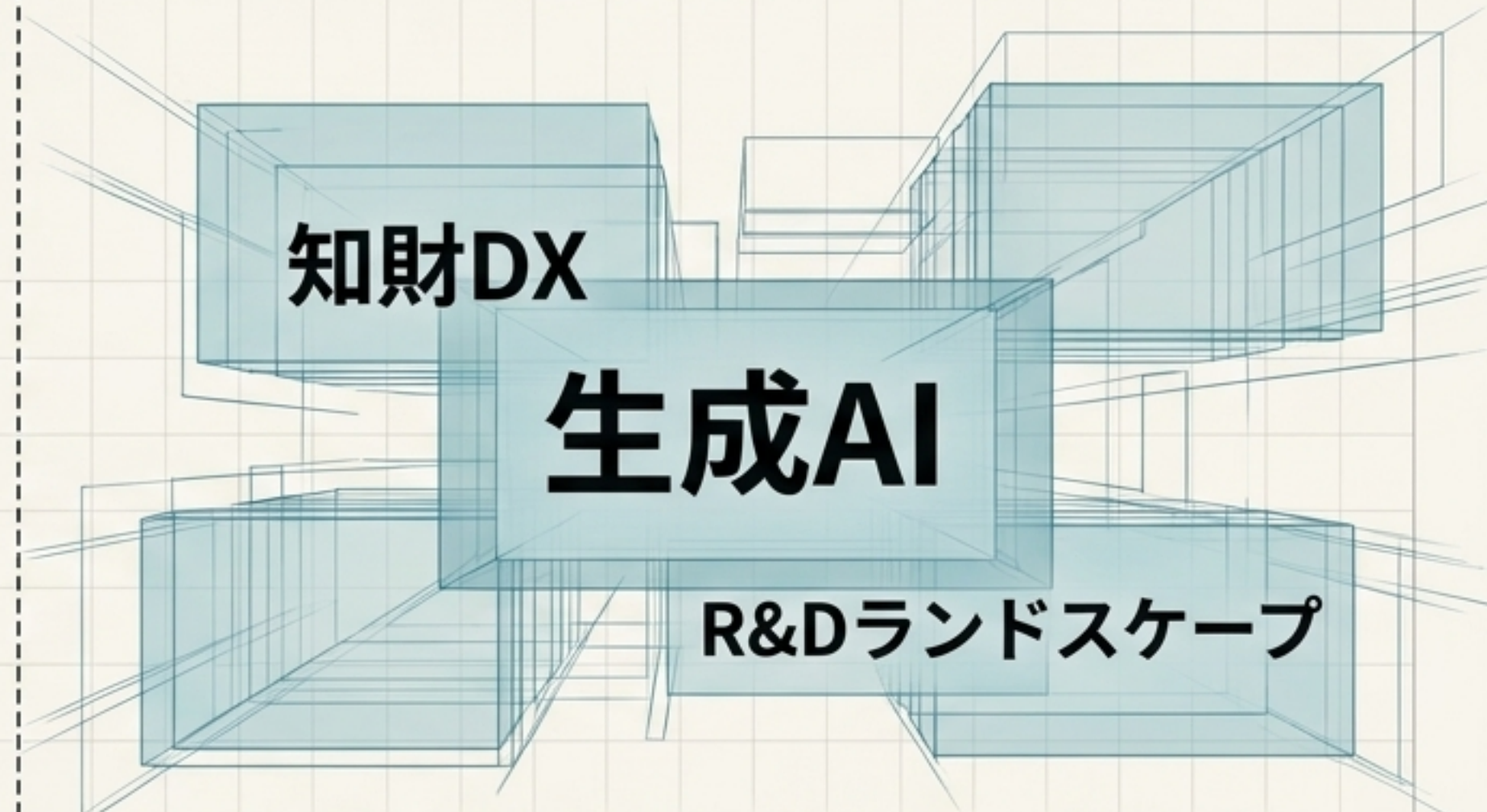
The Few Exceptions



108のプレゼンテーマ中、「IPランドスケープ」を明示したものは極少。

※トヨタテクニカルディベロップメント（TTDC）「経営層・開発陣を動かすIPL」、PMBOK活用術など一部に限定。

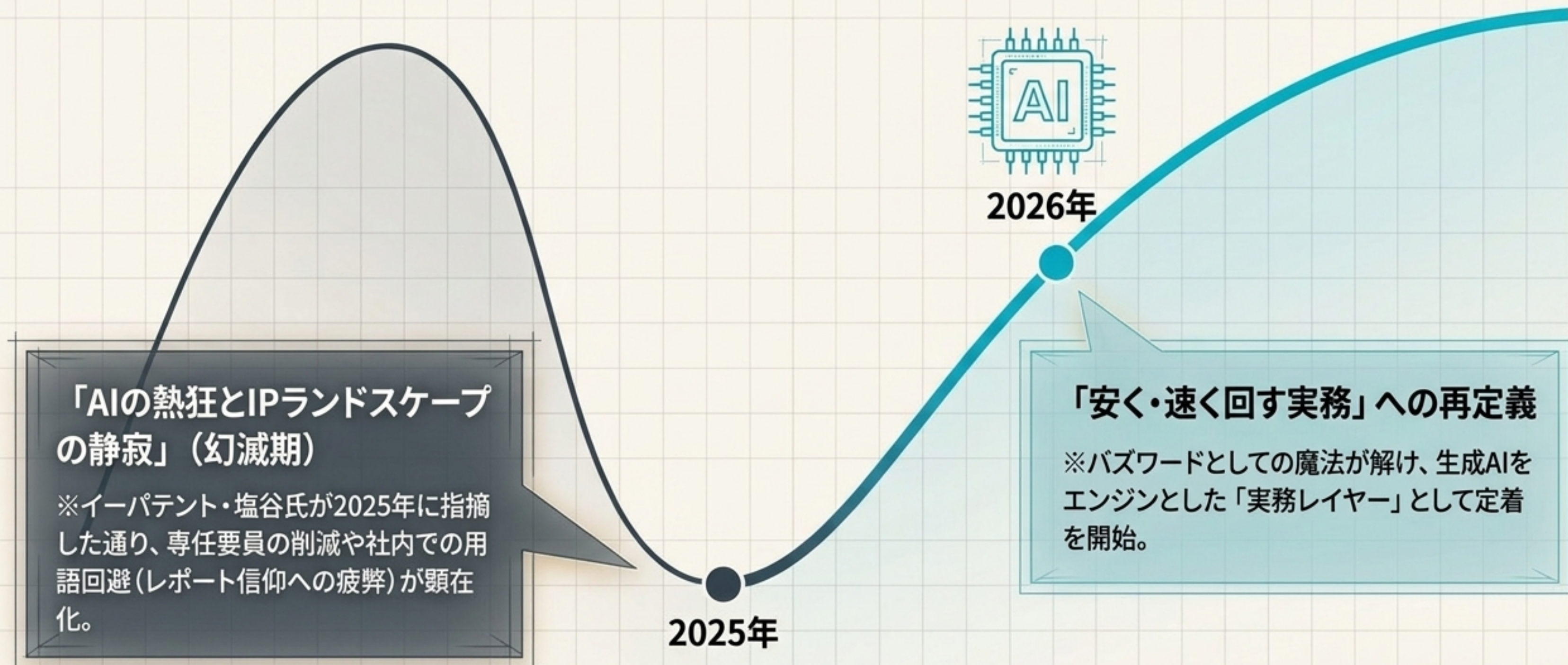
The New Mainstream



「生成AIで変わる知財実務」への圧倒的な用語置換が進行。

※アイ・ピー・ファインの「R&Dランドスケープ」など、別用語への言い換えが目立つ。

ハイプ・サイクルの「幻滅期」を生成AIが突破する



比較マトリクス：知財業界のパラダイムシフト

	2025年	2026年
【焦点】	知財ガバナンス・体制構築 (上位概念への注目)	事業会社の「知財経営」実装事例 (JR東日本の基調級講演など、実践フェーズへ)
【手段】	専任要員による 属人的な人力分析	生成AI・エージェントによる 一気通貫の自動化
【課題】	用語の忌避・過剰な期待による 体制縮小	AI分析の品質(ハルシネーション)と、 ベンダー間の権利係争

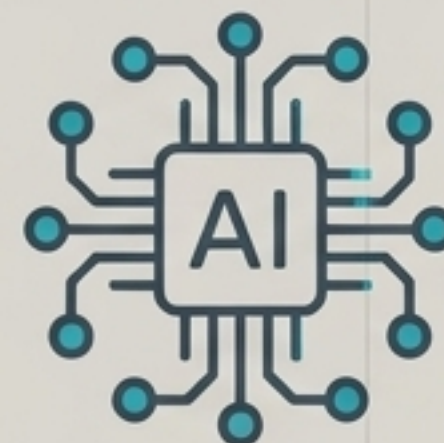
ベンダー動向：生成AIによる「痛点の直接解消」競争

新興AIネイティブ勢力



- エムニ (emuni) : 「AI特許ロケット」
- 「調査コスト99.9%削減」 「最短10分」
- IPLの最大の痛点（工数・費用・高度なスキル）を物理的に消滅させる訴求。

既存プラットフォームのAI重武装化



- Patentfield: 特許ドメイン特化LLM「Dシリーズ」、生成AI要約「AIサマリー」
- LexisNexis: 生成AIアシスタント「Protégé」
- LLM特化機能、AIエージェントの全面投入による業務高度化。

IPLは「高度な専門スキル」から「SaaS/AIで解決できるタスク」へ。

急加速の裏側に潜む摩擦と法的リスク



激化する競争と不正競争防止法

2026年9月（会期直前）、パテント・インテグレーション社が新興AIベンダー（エムニ社）の広告表示に関し、不正競争防止法に基づく差止等請求訴訟を提起。

実務への示唆

「99.9%削減」等の広告的数値を鵜呑みにしてはならない。生成AIの導入には、自社データでの検証（出典追跡性・ハルシネーション率の確認）が必須となる検証フェーズへ突入している。

用語の二極化を引き起こす構造的制約

【官・啓発領域】(INPIT / 推進協議会)

引き続き「IPランドスケープ」を使用。
● 中小支援（累計約300件）を通じ、単なる調査から「経営課題に迫る活動」へ再定義。

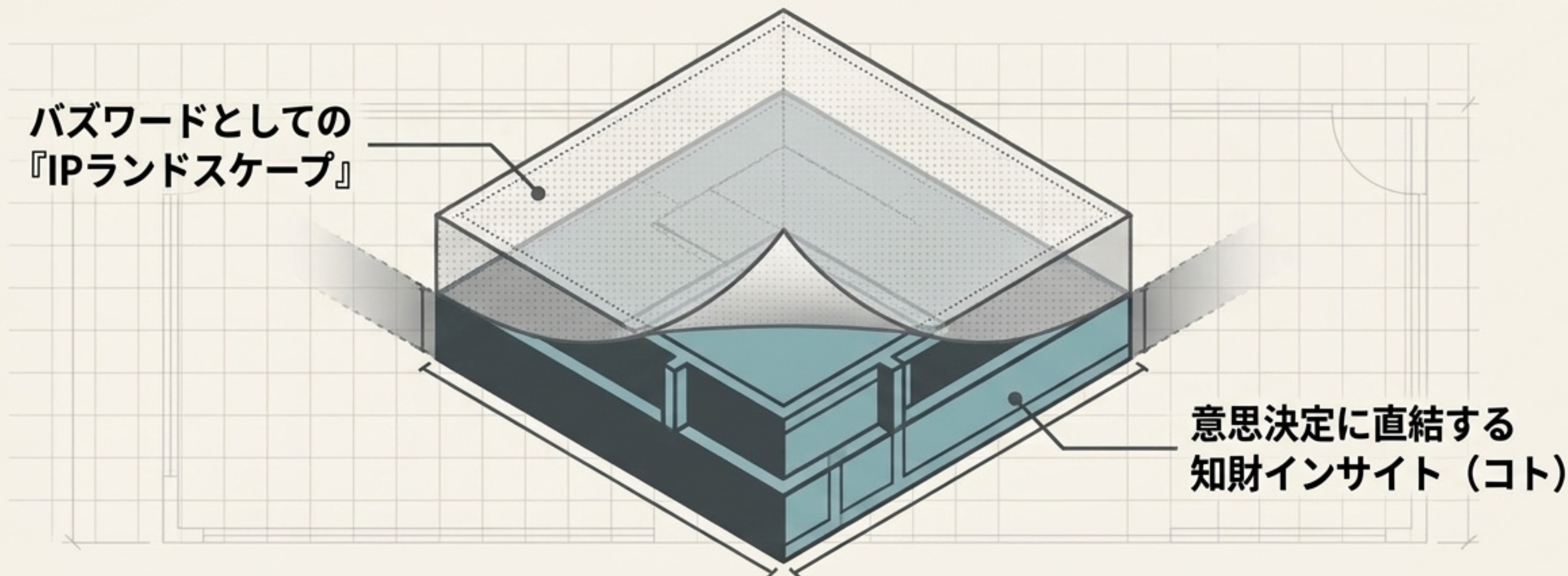
構造的制約（商標）

「IPランドスケープ」は特定個人の登録商標（第6000370号）であり、ベンダーが商標的に自由使用しにくい構造が、言い換えを加速させる一因となっている。

● 「知財インテリジェンス」「R&Dランドスケープ」へ置換。

【ベンダー・実務領域】(事業会社 / SaaSベンダー)

用語の減衰は、活動の「主流化」を意味する



「IPランドスケープ」という言葉への固執はもはや不要である。

用語としては減衰局面にありながら、「知財情報を経営・事業の意思決定につなぐ活動」としては、生成AIというエンジンを得て、むしろ主流化・民主化のフェーズへと移行した。

新たなパラダイム：AIと人間のハイブリッド・ワークフロー

【前半（AIの領域 / 圧倒的高速化）】

データ収集

情報マッピング・作図

一次分析・要約

AI Agent (Dシリーズ, Protégéなど) が処理

【後半（人間の領域 / 高付加価値化）】

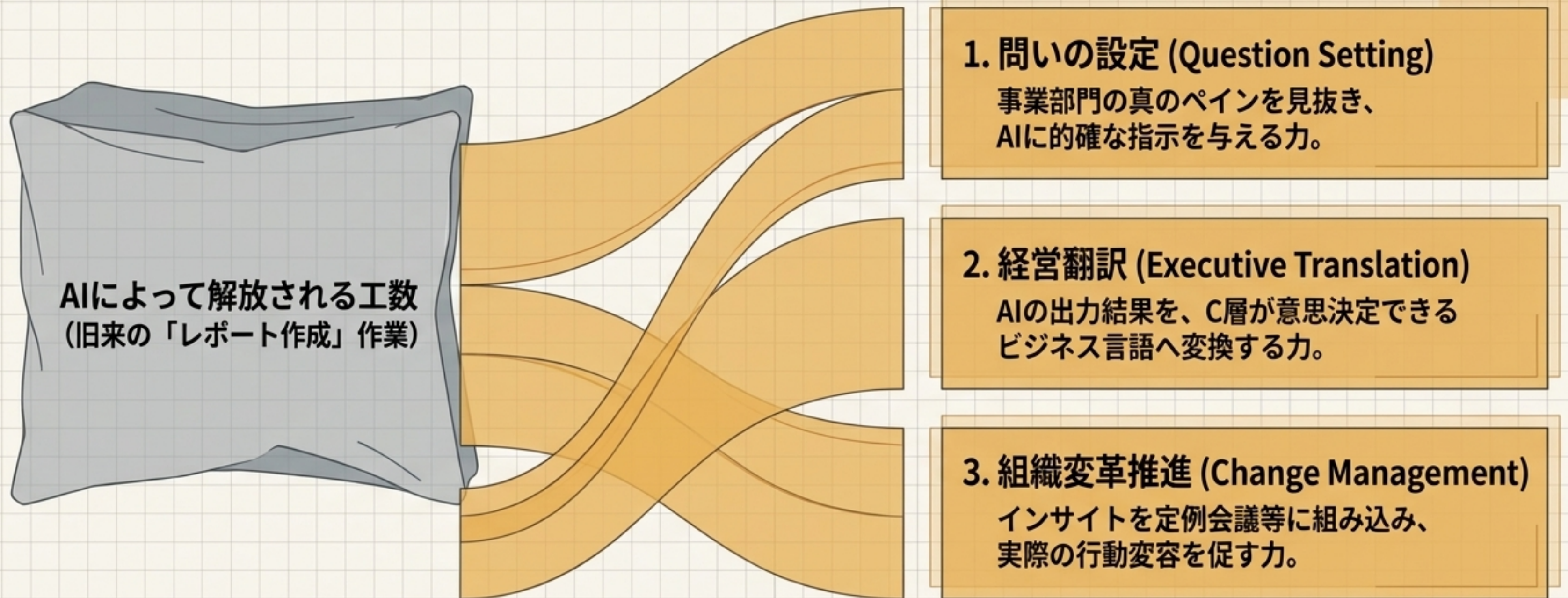
経営への「問い」の設定

インサイトの経営翻訳

組織の合意形成と行動変容

Human Strategist が推進

人間側のリソース再配置 (Reallocating Human Value)



レポート納品型から、定例会議へのインサイト組み込み型へ。

生成AI時代の知財実務 実行ロードマップ

【即時】

用語の刷新とマインドリセット

「IPLレポート納品」から脱却し、「意思決定に効くインサイトの継続提供」へ。社内での呼称にこだわらない。

【3～6ヶ月】

AIのPoCと定量化

AIツール（AI特許ロケット, Protégé等）を自社データで検証。作図・一次分析の工数削減率（KPI）を見極める。

【6～12ヶ月】

人材要件のピボット

知財部員の育成軸を従来の「検索・分析スキル」から、「経営翻訳・問い設定」へとシフトさせる。官の枠組み（INPIT支援事業）も併用。

戦略見直しのトリガー（Checkpoints for Adjustment）



① 出典追跡性の確立

AIの分析結果の再現性・出典追跡性が自社の実務水準に達したか？

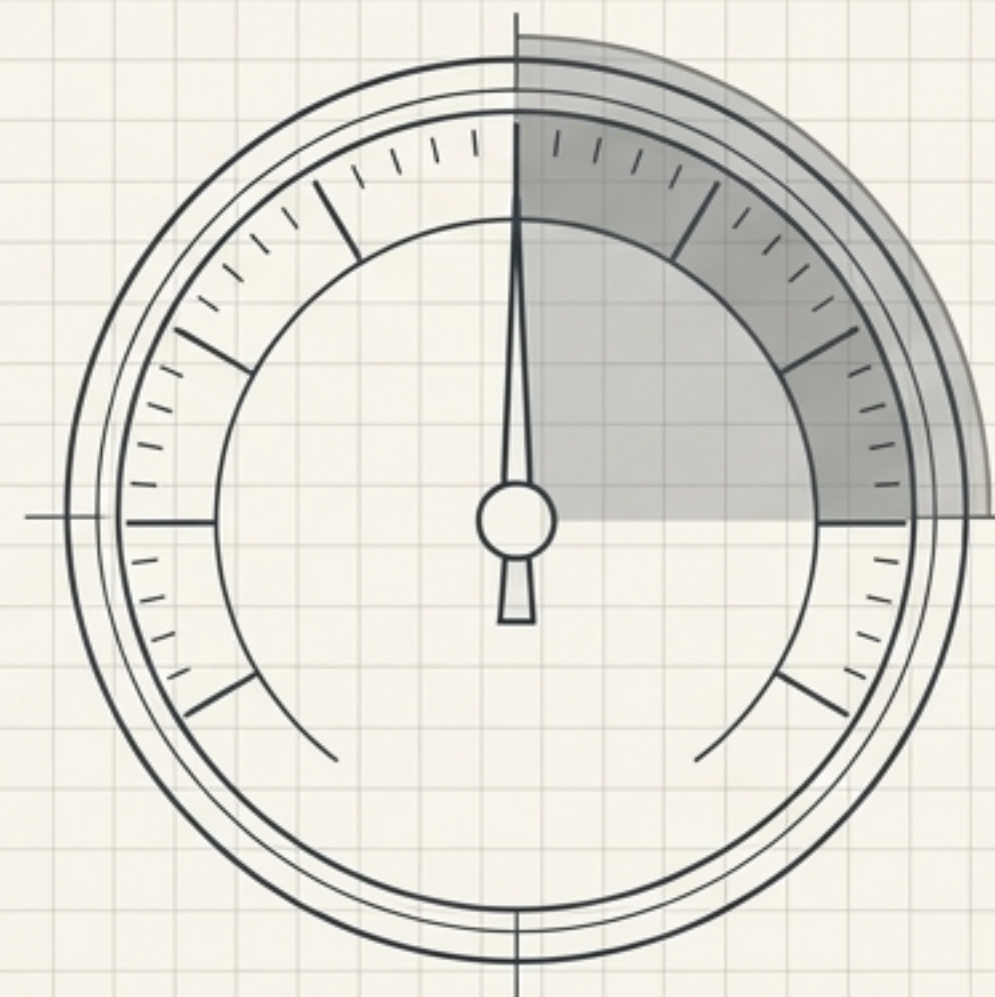
→ [達すれば内製比率・自動化をUP]



② ハルシネーションの閾値

AI特有の幻覚・品質低下問題が許容範囲内に収まっているか？

→ [課題が残る場合は、人間による検証工程を維持]



③ PIFC 2027の市場動向

次回のPIFCで「IPL」の語がさらに減れば完全置換。増加に転じれば再ブランディングを検討。

→ [次年度のトレンドで最終判断]

The End of the Report Cult, The Beginning of True Intelligence.

IPランドスケープは「バズワード」としての役目を終え、
生成AIというエンジンを得て企業の「標準機能」へと進化した。

レポート信仰を脱却せよ。人間の真の価値が試されるのは、ここからである。